日本の食料基地育んだ豊かな大河を次世代へ

北海道建設新聞　令和5年10月3日付　6面、7面（1/2）

日本の食料基地育んだ

十勝川治水100年

徐々に整備効果を発揮

加えて物流が変化。船運や材木を流して運ぶ流送が主流だったが、河道の直線化で流れが速くなると輸送が困難になった。陸路による輸送が発展し、道路整備が本格化する契機となった。

このほか、農業用取水施設として道内随一の規模を誇る千代田堰堤、流

徐々に事業効果が現れている。

より安全で豊かな川へ

治水100年を迎えることし、帯広開建は十勝川水系河川整備計画を変更した。2016年夏の台風災害や将来の気候変動の影響を踏まえた目標流量の設定、その実現に向けたハード整備の方針、グリーンインフラの推進などを新たに盛り込んだ。

目標流量は帯広地点で毎秒67000立方㍍（1600立方㍍増）、茂岩地点で毎秒1万4100立方㍍（3000立方㍍増）となる。実現に向けて既存ダムの再整備や環境に配慮した河道掘削を進める方針だ。掘削で生じる泥炭を土壌改良材にした

十勝川を象徴する現在の十勝大橋

治水と発電に貢献する十勝ダム

ほか、立木を木質バイオマスボイラの燃料とする取り組みなどを展開。自然再生に向けては、生物多様性の回復に努め、河川空間を観光資源としてより活用する考えだ。

全長15.2㌔の雄大な十勝川統内新水路。23年度土木学会選奨土木遺産に認定

歴史学び、未来につなげる
記念の取組続々
防災意識向上へ

治水100年の節目を記念した事業がめじろ押しだ。官民15機関・団体がイベントを主催。今の十勝川を作り上げた先人の遺業をたたえ、歴史を振り返ることで、治水が持つ役割の再確認や防災意識の向上につなげる。

6―10月に管内19市町村を回るパネル展を開催。写真とともに治水事業や水害の歴史を紹介している。秋には50年の歴史を詰め込んだ続・十勝川治水史（仮称）を発刊する。

体験型イベントでは、夏休みの小学生を対象とする一日河川事務所長体験などを実施した。十勝川を深く知ってもらう機会とする。

10月にはよつ葉アリーナ十勝で記念式典とシンポジウムを開く。十勝大橋周辺に記念碑を建立し、治水に携わった先人の功績をたたえて流域のさらなる発展を目指す。

記念イベントの詳細はQRコードから閲覧できます。

川づくりで築いたまちと農業

十勝川で1世紀にわたって展開してきた治水事業。その過程で十勝の生活や産業はどう変わり、現在に至るのか。帯広百年記念館で歴史担当の学芸員を務める大和田努さんに聞いた。

「100年契機に治水へ関心持って」

―十勝川で治水事業が始まった背景は。

1898（明治31）年に7日連続の大雨で十勝原野一帯が冠水した。被害は大きかったが、当時は人口が少なく、インフラも整っていないため石狩川や他地域の河川整備が優先された。

しかし、大正時代に入ると十勝の豆や雑穀を鉄道で出荷するようになり、商売でもうかった人がピートの工場を誘致したり、農産物の加工に着手したりした。人や設備が増え、十勝の農産品が他地域に広まった1922年、再び大洪水が起こる。その時期には人の営みや経済が確立されていたため、十勝川治水事務所を設置して本格的に事業を始めた。

現代は災害発生後、自然の猛威を認識

―なぜ十勝経済圏の中心が帯広になったのか。

地理的に物資の集積地として優れていた。東西を横断するように十勝川が流れ、北は音更川、十勝川、南は札内川が流れて土地が開けている。川のおかげで多方面から物が集まる利点があった。

明治時代、池田町を十勝の中心とする議論があったという。十勝川最大の支流である利別川の合流地点であり、十勝川の船着き場の中で最も栄えていた。人や物が集まり、インフラが整い、鉄路やオホーツクとも鉄路でつながっていた。

しかし、十勝や広尾方面、北海道の中心であった札幌からも遠いため、十勝の中心は帯広に決まった。

―十勝川や支流が地域発展の要だった。

人や物が集まる半面、洪水のリスクが高く、治水事業を求める声が出た。昔は洪水で流されても、翌年に大豊作なら良いという考えだったが、工場や高額な機械が入り、他地域に物を売って生活する仕組みができるとそうもいかない。

―治水事業が十勝にもたらしたものは。

治水事業の基本は蛇行した河川を真っすぐにすること。その過程で河川だった所を農地に転用し、耕作面積が拡大した。十勝川統内新水路はその代表だ。付近の供水被害も抑制できたため、農業王国としての確かな礎を築いた。

―100年の歴史の中で十勝川の治水事業に思うところは。

現在は治水事業で守られている分、川が身近ではなくなってきた気がする。2016年の台風災害のように、水害があって自然の猛威に気付く。日々生活していると感じる機会はないが、気候変動など災害のリスクは高まっている。

治水100年を機に治水事業とは何か、日々どんなことをしているのかなどを広く発信して、多くの人に関心を持ってもらい、わが事として考えてもらうことが重要だ。

帯広百年記念館 学芸員
大和田 努 さん

大和田 努（おおわだ・つとむ）1985年12月8日生まれ、本別町出身。北大文学部を卒業し、同大学院で博士課程を修了。専攻は日本史学。2014年から正職員として帯広百年記念館で勤務する。

十勝川治水100年記念シンポジウム

2023年
10月21日（土）
15:10―17:00

会場：よつ葉アリーナ十勝（帯広市総合体育館）

■講演「生きることは食べること」
俳優・タレント 森崎 博之 氏

©CREATIVE OFFICE CUE

■パネルディスカッション
「十勝川を次世代に引き継ぐために」

申込詳細はこちらまで

問い合わせ先：
帯広開建 総務課 0155(24)2901
広報官 0155(24)3193

十勝川治水100年

日本の食料基地育んだ豊かな大河を次世代へ

北海道建設新聞　令和5年10月3日付　6面、7面（2/2）

豊かな大河を次世代へ

1923（大正12）年に十勝川治水事務所を設立し、本格的な治水事業が始まってからことしで100年を迎える。明治や大正初頭の大洪水を契機に流域住民の間で治水の機運が高まり、大規模な事業が始まった。幾重にも折れ曲がった河道の直線化をはじめ、農業取水施設やダム、護岸を整備。水害との戦いの中で着々と工事を進め、今や日本の食料基地とも呼ばれる農業王国・十勝を築いた。

町と豊かな畑が広がる現在の十勝川流域

洪水で平野一帯が沼地

十勝川は新得町の十勝岳に発し、管内17市町村を流れて太平洋に注ぐ1級河川。流路延長は156㌔で、流域面積は9010平方㌔と全国6位を誇る。

氾濫で集落や畑は何度も水没した

明治初頭から民間人が入植し、川沿いを中心に開拓が進んだ。自然のままの十勝川は大雨や雪解け水による洪水が頻発し、何度も人家や農地を襲った。中でも1922年の大洪水は帯広市西帯広から豊頃町大津にわたって平地が冠水。一帯が沼地と化した。

水害防げ！事業1世紀

十勝川治水事務所は帯広警察署跡に設けた。現在の帯広市大通南1丁目、よつ葉アリーナ十勝南向かいに位置する。

優先したのは開拓の中心だった帯広市西帯広−豊頃町茂岩間56㌔の新水路掘削や築堤、護岸。中でも河道の蛇行が著しい下流部には道内屈指の人工河川となる十勝川統内新水路を整備した。延長15・2㌔、低水路幅160−180㍍に及ぶ直線状の新水路だ。

当時、作業の中心にいたのは地元の農民ら。収穫期を経てお金が入る農家にとって、土木工事はすぐに給金が手に入る副業として最適だった。人が掘った土は農作業で活躍した馬がトロッコで運び、工事を進める上で大きな原動力となった。

当時の現場写真には女性の姿が目立つ。昔は専業主婦というのはなく、共働きが当然だった。工事を急ピッチで進めるため、男女を問わず多くの人が現場に入った。十勝川統内新水路は着工から約10年で完成。水害を防ぐだけでなく、湿地だった一帯の水はけが改善し、広大な原野が豊かな農地となった。

人馬が活躍した昭和初期の治水工事

在りし日の十勝川治水事務所の様子

十勝川治水100年に寄せて

先人の遺業が"今"を築く

令和５年は、大正12年に十勝川の治水事業が始まって100年を迎えます。これまで十勝川治水事業に携わってきた先人達の遺業に心から敬意を表しますとともに、今後とも、関係者の方々の一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

北海道の大河、十勝川流域は、アイヌ文化が広がっていて、明治16年に依田勉三を中心とする「晩成社」が帯広に入植してから、本格的な開拓が進められた。十勝川は、舟運で利用される一方、大雨が降ると度々洪水を引き起こしました。

そのため、大正７年に治水計画の大綱を確立したものの、大正11年（1922年）８月洪水が未曽有の被害をもたらしたため、これを契機に治水計画を改訂しました。その内容は、最も被害の著しく、かつ開拓の中心地域である「茂岩から西帯広」までの区間に堤防、新水路掘削、護岸工事を実施するものでした。

この壮大な計画を遂行するため、大正12年に十勝川治水事務所が開設され、池田町市街裏堤防及び千代田鉄道橋上流堤防工事に始まり、十勝川統内新水路、さらには十勝川と大津川の分流、十勝ダム、札内川ダムの建設、木野引堤工事、千代田新水路工事等を行ってきました。

その間、昭和37年洪水、昭和47年洪水、昭和56年洪水、平成28年洪水等、度重なる自然の猛威を受けながらも水を治めてきた先人達の労苦の結晶により、十勝は、いまや我が国における代表的な食糧供給基地として成長を遂げ、小麦、馬鈴薯、小豆などの畑作、酪農・畜産を中心とした大規模農業が営まれるとともに、これらを加工する食料品製造業が盛んな地域となっております。また、サケの増殖事業も行われており、沿岸域の漁業も盛んです。

帯広市を中心とした帯広圏は、鉄道、道路などの交通網の整備や治水事業の伸展に伴い市街地が発達し、道東地域の社会・経済・文化と拠点となりました。温泉、自然環境、農村環境、川などを活かした体験・滞在型観光や環境教育も盛んです。

本年の治水100年を記念して、これまでの100年間を振り返るとともに、未来につながる記念事業を展開してまいりますので、よろしくお願いします。

帯広開発建設部長

井田泰蔵

十勝川治水の歴史

元号	年	出来事
明治	1898	7日連続の大雨により洪水が発生 死者21人、氾濫5989㌶
大正	1919	台風による大雨で洪水が発生 死者3人以上、氾濫3万4900㌶
	1922	台風による大雨で洪水が発生 死者9人、氾濫5243㌶
	1923	十勝川治水事務所を開設【大正12年・治水事業開始】
昭和	1928	帯広治水事務所を開設 十勝川統内新水路に着手
	1935	千代田堰堤が完成
	1936	低気圧による大雨で洪水が発生 死者1人、氾濫4614㌶
	1937	十勝川統内新水路が通水 利別川の川合新水路で工事始まる
	1948	札内川堤防整備本格着手
	1950	利別川の川合新水路で工事再開
	1951	音更川堤防整備本格着手
	1956	川合新水路が通水 現浦幌十勝川の堤防整備本格着手
	1962	台風による大雨で洪水が発生 死者・行方不明者4人、氾濫4万7768㌶
	1963	トイトッキ築堤を締め切り、大津川に切り替え 十勝川毛根中島河道切り替え工事着手
	1965	十勝川の下流部浚渫事業着手
	1972	秋雨前線と台風による大雨で洪水が発生 死者5人、氾濫3万7729㌶ 帯広排水機場完成 札内川上流域砂防堰堤・床固め工群整備を開始
	1973	十勝ダム建設着手＝84年完成
	1975	低気圧による大雨で洪水が発生 氾濫2698㌶
	1978	下牛首別排水機場が完成
	1980	十勝川河口締切堤工事に着手
	1981	停滞前線の影響による洪水が発生（56水害） 氾濫7017㌶、被害総額548億円
	1982	浦幌十勝導水路が完成
	1983	池田排水機場が完成
	1985	札内川ダム建設着手＝98年完成 十勝大橋上下流で引堤と低水路切り替えに着手
	1988	低気圧による大雨で洪水が発生 氾濫366㌶、被害額173億円
平成	1989	低気圧による大雨で洪水が発生 氾濫3940㌶、被害額68億円 育素多排水機場が完成
	1992	高島橋、高島頭首工の改築に着手
	1995	2代目となる現在の十勝大橋が完成
	1998	台風による大雨で洪水が発生 氾濫1907㌶
	2001	低気圧による大雨で洪水が発生 氾濫298㌶
	2002	相生中島地区整備へ川づくりワークショップ設置
	2003	台風による大雨で洪水が発生 氾濫369㌶
	2007	千代田新水路が完成
	2009	十勝川相生中島地区整備に着手
	2010	十勝川中流部川づくりワークショップ設置 十勝川中流部整備に着手
	2012	十勝川中流部川づくり案取りまとめ
	2016	3連続台風による大雨で洪水が発生 死者・行方不明者2人、氾濫1412㌶
令和	2020	流域治水の取り組み推進
	2023	十勝川水系河川整備計画変更【令和5年・治水100年】

十勝川治水100年